

お名前	性別	終戦時の年齢	現住所
もりや かめえ 森谷 亀江	女性	15歳	市内片山 (市内一鉄田)

## 心に残る恩師の言葉「命」

「戦いのなかで」より

(新城市老人クラブ連合会発行)

清水野小学校初等科6年と言った私の少女時代、日本が大東亜戦争に突入した頃でした。家から学校まで4キロの砂利を、ワラ草履をパタパタとほこりを立てて通ったものでした。

祖母の作ってくれた草履は、赤い布で緒を巻いてとても履きよかったが、大体1日履くと踵が切れてしまった。父が作ってくれたものは、頑固でまるで牛に履かせるよう、3日くらいはもつが緒ずれで水ぶくれができ、血が出て痛かった。

現代の子供のように、恵まれた環境の中で勉強だ塾だとしばられるということではなかったが、家の手伝いもよくやったし、それでも女学校進学希望でそれなりに勉強もしたものです。6年生の時のS先生は、第一師範学校出身の脂の乗り切った若くて背の高いハンサムで、ラジオのようなよく透る声でした。

軍国調はなやかな当時、体操時間は、ケンスイ、竹槍訓練、分列行進などばかりでした。教育勅語や宣戦の大詔を暗記するなど、とにかく「勝つため」に戦争一色の教育だったように思います。「欲しがりません、勝つまでは」大人から子供まで「一億火の玉」でした。

歌の文句にも「白木の箱が届いたら」とか「死んで帰れと励まされ」等々、国家のために死ぬということは、最高の忠義と教え込まれた時代……そんな中で忘れられないS先生の言葉、

「人間死んじゃあだめだ。手柄を立てて生きて帰って、またお役に立つんだ。とにかく死んじゃあいかん！」と。

決死の覚悟を指した当時の死と、やたらと命を粗末にする時代の死とは、天地の差があるけれど、どんな理由があろうとも死んではおしまいです。

人間だれでも生涯に一度や二度は、死んでしまいたい、などと思うほどの苦境に立たさ

露営の歌 1937年

作曲 古関裕而

勝って来るぞと勇ましく  
誓って故郷（くに）を出たからは  
手柄立てずに死なしようか  
進軍ラッパ聴くたびに  
臉に浮かぶ旗の波

弾（たま）もタンクも銃剣も  
しばし露営の草枕  
夢に出てきた父上に  
**死んで還れと励まされ**  
覚めて睨むは敵の空

れる時もあるでしょう。そんな時、私は子供心に胸に沁みたましたS先生の言葉をいつも思い出すのです。最近社会問題になっている「いじめ」も辛いでしょうけれど、死を選ぶ前に「命の大切さ」をもう一度しっかり考え直してほしいのです。

旧制高等女学校3年生の8月15日、炎天下の校庭で玉音放送を聞きました。「敗れた」という悔しさの反面、もうこれで明日からB29の空襲に逃げ惑うことはない、という安堵感が交錯したのも事実でした。父は無事復員したけれど、その弟二人は陸軍と海軍で戦死、国のためを信じて20歳代の若い命は南方に散りました。

わが新城高女の上級生は、豊川海軍工廠へ学徒動員され、あの空襲で22名もの尊い命を失いました。私たち下級生も講堂が疎開工場となり、3交替の夜勤もして兵器の増産に励みました。

今のこの平和の礎となった方々のためにも、私たちは限りある人生を大切に生きていかなければならないことを痛感する次第です。